

周室の衰頹：論説

著者	武藤, 虎太
雑誌名	龍南會雜誌
巻	51
ページ	1-14
発行年	1896-12-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/4657

龍南會雜誌第五拾壹號

論 說

周室の衰頹（承前）

教授 武藤虎太

第二章

第一節 春秋初代周室の衰頹

孟子曰く、春秋無義戰と、顧ふに二百四十二年間、諸侯相伐ち君臣相争ひ、倫理綱常地を掃ひ忠孝節義既に光を失ふ。實に是れ支那に於る暗黒時代なり。然れども源泉既に濁る矣。支流豈清きを得んや。抑も平王の立つや、實に中侯に由て救を犬戎に乞ひ、幽王を殺し以て其已をなせり。理を以て之をいへば、申侯は父の讐なり、君父之讐は俱に天地を同うせず。是三尺の童子も亦能く知悉する所、而して平王は申侯の已を立てるを徳とし、親を忘れ義に背く、其罪を天に得るや已に甚し。戎狄は周室古來の外臣なり。古來聖明の君曾て之と齒するを耻づ。故に曰く戎狄是膺荆舒是懲と。其之を遠くする所以の意即ち見るべし。而して平王は申侯に頼て荆蠻の力を藉れり。嗚呼戎狄は犬豕視せり。今や膝を屈して援を乞ふ。誰か知らん、此膝一度び屈して四夷の勢益張り、遂に戰國を経て邦家の淪亡に至る迄、曾て之を伸ばす能はざりしことを。夫れ堂は天下政令の出づる所、天王は邦家の元首なり。而して今や自ら極惡大罪を犯し、恬として悟らず。萬乗の尊を以て膝を醜虜に屈す。嗚呼源流已に濁る矣。何ぞ支流の清を望むべけん。況や行雨江潦の水、又從て之を濁す。千載の下誰か復た東周の興らざるを怪す

んや。孔子の父侯之命を以て書の終篇とするも、唯其父武の舊を言を以て戒を天下に示し、人を以て言を弄てざるの意に出るか。

然れども是れ唯大義名分の論のみ。固より名不正不相爲謀是れ人道の大本なりと雖、周室の頽勢に陥りたるもの、亦他に夥多の原因無んばあらず。顧ふに古來之を論するもの尠からず。蘇子瞻は周室の東遷を論じて曰ふ。

周之失計未有如東遷之謬也。自平王至於於亡。非有大無道者也。德王之神聖。諸侯服享。然終以不王。由東遷禍也。

蓋し平王位に即て、猶西周に都せしも、大戎の憂常に絶えず。且つ一たび幽王を酈山の下に殺して以降、周室の鼎の輕重は、略已に之を知悉し、隙の乘すべきあれば、則ち直ちに機を視て動かんとす。是に於てか斷然策を決して洛邑に遷るに至れり。苟も子瞻の説の如く從來の功臣と共に依然西周に在りて、中興の策を行ひ、西戎を制馭せば、周家の頽勢も未だ俄かに傾くに至らざりしなるべしと雖、然れども當時の勢を考ふるに、徒らに西戎の爲す故に西周に在らば、東南の地は漸く將に王化を忘れ、諸侯自立し、民人背叛し、天下復た爲す可らざるに至りしもの亦之れ有らん。則ち東遷の事、亦幾何か衰頽をして速かならしめたるもの有りと雖、然れども直に取て以て、衰頽の唯一原因と爲す可らざるに似たり。

蓋し事物の原因は、幾多の遠因近因誘因等ありて始めて一の變動を生ず。朔風凜烈。而して白雪飛ぶ。寒風は唯是れ一箇の誘因たるのみ。水蒸氣の凝結するは其近因たるべく、而して河海の水陽光に照らされ、暖温の氣蒸して昇騰せるは其遠因と謂つべし。瑣細の一事物、其原因の複雑なる已に斯の如し。

何を況や人事の雜駁なる、世變の多故なる、其原因豈一にして足らんや。周室の衰頽亦實に斯の如く、一病已に身を襲ひ、藥石未だ治効を奏せずして、他の病魔相踵で襲來る、軀体強健の人と雖ども、焉ぞ能く之に堪へん。而して扁鵲蒼公の妙技も、遂に施すの餘地無きが如く、平桓以後は殆ど復た收拾す可らざるに至れり。今殊に其主要の原因を尋繹せん。

第二節 封土分割

土地は人民の生命なり。飲食由て以て生じ衣服賴て以て成る。人民を除て國家なく、國土を去て邦家なま。即ち知る、土地人民は國家の重要元素なるを。是故に和漢洋を問はず、苟も國あれば必らず先づ國土を經し疆域を界し溝洫を通し畎疇を浚へ農の時を奪はず、人君是に由て尊く、國家是に由て統一す。是れ理の最も略易きもの、亦多言を要せざるなり。周の初め功臣を封じ諸臣を立て務めて王室の蕃屏たらしめんと欲す。是れ賢君上に在り良臣朝に滿るの日に在ては其弊を見ざるも、一旦主暗く臣驕るに及びては逆施倒行尾大不掉に至るは前章既に論するが如し。即ち周室の制度も、此點に於ては既に多少の缺點を免れざるべし。而して宣王以後の封土分割に至りては、明かに其缺點を加へたり。

初め宣王立ち、英邁の資を以て頻に中興を劃く、積衰積弱の頽勢を挽回して、周室當年の盛時に復すは内治を張ると同時に皇威を四夷に輝すに在りとし。首として秦仲に命じ、西戎を征せしむ。六年にして秦仲死す。子莊公に至り西戎を征えて功あり。是に於て犬丘(甘肅洲秦州)に居らしめ、以て西邊の鎮守と爲す。是れ實に秦始皇の先にして、是より歷世四隣を蠶食し、終には西周の地を掠略するに至れり。是れ實に盜に假すに鑰を以てしたると一般、周室の分裂の兆は實に茲に生まれり。

降て平王に至り、初めに東遷の事あり。而して晋文公は殊に王家に勤勞有りしことは、書の文侯之命に、

父義和汝克昭乃顯祖汝肇刑文武用會紹乃避遐孝于前父人汝多修捍我于艱若汝我嘉

とあるに由て徴すべく、而して河内の地（河南省懷慶府）に封し、以て之を寵異せり。而して秦は宣王の時以來頗る勤勞あり。是に至て又岐西の地を賜ひ、始めて諸侯に列せり。蓋し之を以て西戎の保障と爲さんと欲せしも、何ぞ知らん西戎を征伏するの日は、周鼎の輕重を問はんと欲するの日にして、却て自ら獅子身中の蟲を養ふに至れるを。

然れども功を賞し勞に酬るは、邦家の典刑なり。況んや封爵は周の常制なるをや。苟も駕御宜を得ば諸侯の背叛豈彼れが如く速かならんや。且つ夫れ晋秦二國と雖ども初めは頗る周室に勤むるの意なり。周室の齡は其餘命を保ち得べきも、如何せん當時秦は戎狄防禦と自國警衛との爲に惟れ日も足らず。殆ど力を中原に致すの餘地を有せず。而して晋には常に内亂有り。史記晋世家 文侯之命にも、

王曰父義和其歸視爾師寧爾邦中 父往哉柔遠能邇惠康小民無荒寧簡恤爾都用成爾顯德

由是觀之、晋も亦力を王室に致すの遠近なきなり。而して鄭武公は此際那底事を爲せしか。

抑も宣王の時、鄭桓公友の司徒と爲り、鄭に封せらるゝや頗る器材あり。子武公に至り亦司徒と爲りて令名あり。詩人其徳を賞して緇衣の篇を歌ふに至れり。然るに桓公は王室の必ず亡び而して禍の其軀に及ぶを慮り。太史白陽父に問ふて號（河南省陝州盧氏縣）檜（河南省開封府密縣）の間を占斷し、徐に終焉の計を爲して以來武公も亦其轍を踏み、自ら難を避け安を偷むに汲々として、復た周室を顧みず、是に於て宣王以來地を分て、忠勤を勸獎せんと欲せし封土班賜の擧は、遂に王權を削弱して諸侯

王の私を濟する階と爲るに至れり。業已に茲に至りては中興の業將た焉ど之を望まん。東遷の一舉蓋し亦一時を繡縫し命脉を維持せんと欲せる苦肉の策たる知るべきなり。

孟子曰く、王者之跡止詩亡詩亡而後春秋作と、抑も詩は諸國を巡狩して、國風を觀る所以なるも、今や王室の威令行はれず、巡狩の制已に亡ぶ。是故に平王以後の詩は列國と同じく國風に編し以て王風と稱せり。嗚呼詩亡而春秋作る。詩の亡ぶるは周室の精神氣魄已に亡るの時なり。春秋の作るは諸侯王獨立の形體將に備るの時なり。世變に由て以て邦家の興廢を知る封土分割の一事、豈些事として看過すべきものならんや。

第三節 天王下交

天王は諸侯王の盟主、萬民の耳目なり。是故に朝覲會同以て諸侯を延見し、政刑典禮以て黎民を率ゆ其權若く無く其尊加ふるなし。王權寢微なるに及びて、始めて、萬乘の尊を屈して、臣下に交るの事有り。而して其權遂に復た延びず。始め平王立て四十九年天王宰暄をして惠公仲子の駟を歸らしむ。魯は諸侯なり。而して平王は殊に敕使を發して香奠を賜ふ。禮に厚きの致す所と雖ども、是れ豈天王下交の端を啓けるもの非ずや。下交誼を厚うする尙可なり。五十一年天王崩するに及び、魯は王喪に共奉せず。却て武氏の子來りて賻を求るを煩はす。亦已に甚しからずや。抑も隱公一代周王數は禮を加ふ、而して魯は一たびも答禮せず。天下無道ここに極る。況んや周公の後と稱する魯にして既に然り。何ぞ他の同姓異姓の諸侯を咎めむや。

初め鄭の武公莊公共に平王の郷士たり。王其政を專にするを忌み、西虢公をして政事に參與せしめんとし、端なく鄭伯の怨恨を惹き王の辯疏功を奏せず、遂に互に質を納るゝに至れり。抑も盟約は亂世

の事のみ。故に聖王上に在れば聞として聞る無し。人道陵夷し衆心離貳忠信殆ど絶えて、譎詐交も作る。是に於てか血を歌り言を要するの事あり。是故に諸侯疑ありて會同すれば則内吏其盟を掌り、司寇其約に蓋む。是れ王室の諸侯を待つ所以なり。而して今や天子の尊を以て一侯伯と盟ひ、啻に盟ふのみならず、交々實するに至る。嗚呼幾何か下盟の漸を爲さざらんや。

莊公十四年齊陳曹の人、北杏の會に背くを名とし宋を伐ち、師を周に請ふ。蓋し齊の意は天子を崇み王命を假て以て大順を示し、以て其私を濟さんと欲するなり。而して大夫單伯之に會す。宋既に平き單伯復た齊侯宋公衛侯鄭公と鄆に會す。是時に至齊桓已に霸業を修め、宋の亂を平けて宋人を服従せしむ。其實力に於ては既に缺くる所を見ず。唯その名なきを憂ふるのみ。是に於て陽に天子を尊び、其名を假りて其功を歸せんと欲し。遂に單伯に告げて會に交らしむ。單伯たるもの苟も能く之を洞見し、盟主を以て自ら任じ齊桓を壓し諸侯を制せば、周室の事亦少しく爲すべきもの有らん。惜哉機を見て茲に及ばず、齊桓に利用せられて遂に悟らず、空しく其彘籠中のものとなり了る。是亦王臣下交周權削弱の基を啓けり。果然莊公十五年に至り、齊桓始めて覇と爲り、以て天子の事を攝するに至れり。

凡そ王臣下盟の春秋に見ゆるもの前後五回、其二は齊にあり、其四は晋にあり、首止の盟以來齊は王室有るを以て其盟は専ら王室を謀るに意あり。翟泉以後晋は王室已になきを以ての故に、其盟は専ら一の鄭を謀るに在り。平丘の役に至りては、晋には王室なきを以て其盟は専ら諸侯にあり。亦以て世變を知るに足らん。翻て諸侯間の會盟を見るに、隱桓莊閔僖百年の間魯公の會遇盟約せるもの凡そ五十有九、大夫の會盟するもの四、外大夫にして魯公と會盟するもの四、魯與みせずして諸侯自ら會遇

盟約を爲すもの十有四、而して大夫の盟四、斯く文宣以後は諸侯怠りて大夫張り、魯公の會盟十有二、而して大夫の會盟十有一に及べり。是より厥後諸侯の會盟は大夫に移り、大夫の盟約は申の會以後相率ゐて楚に聽くに至れり。之を要するに、幽に盟ふは諸侯にして盟約を主るの始めなり。霸者義を唱へて王を尊み齊に盟ふは諸侯大夫と共に盟ふの始めなり。桓公の好を修め、而して楚人盟に入り、翟泉は則ち諸侯の大夫玉臣と共に盟ふの始めなり。

嗚呼文武復興らずして周道益衰へ、桓文出でずして霸業逾微なり。隱桓の世天下紛々適從する所を知らず。莊公十三年より僖公の末に至る迄、諸侯を統率するの權は遂に伯主に移り、文公元年より以て襄公の末に至りては、大夫遂に伯主の權を盜み、襄公の末年より哀公の獲麟に至りては、夷狄益虜虜陸梁を極めて遂に伯主の權を奪ふに至れり。王臣下交の流弊浸潤して茲に至る。概くに堪ふべけんや。

第四節 征伐移下

禮樂征伐天子より出るは古の法なり。王權振はず諸侯威張り、而して征伐の權下に移るは自然の勢なり。初め平王鄭と隙あり。一旦之と盟し交も質を爲せしも、平王崩えて盟約破れ、鄭の祭足師を帥て温の麥を取り、次で成周の未を取り、其王室に暴行せる亦已に甚し。而して周は其勢以て之を制する能はず、翌年魯の大夫鞏は師を帥て宋公陳侯蔡人衛人に會して鄭を伐つ。是れ諸侯私かに相伐つの事と雖、漸く王室を外にするの風あり。翌年曲沃の莊伯、鄭人邢人と共に翼を伐つや、特に王命を請ひ、王は尹氏武氏をして之を助けしむ。是に於て征伐の實勢は漸く下に移り、九年夏宋公王職に共せずとて、鄭伯は王の左卿士たるを以て王命を以て之を討じ、十年鄆防の地を略して王に歸る。是れ實に王

命を藉りて自ら其私を濟し、諸侯に長たらんと欲するの野心勃々たるものにして、齊桓の霸業以前鄭伯は殆ど己に覇者の實を行ひしなり。

是時に當り鄭伯の威殆ど天子を抑へ、他諸侯を壓し、儼然たる諸侯の伯主なり。是に於て桓王十三年遂に鄭伯の政を奪ひ、以て一切王政に干與するを禁ず。而して鄭伯既に王室の輕重を知るを以て復た朝せず。是年秋王自ら中軍の將となり、蔡人衛人陳人等諸侯の兵を率ゐて大に繻葛に戰ふ。而て蔡衛陳皆奔り王の卒亂る。鄭の師一齊之に乗じ、遂に大に之を破り、其將祝聃王を射て肩に中つ。是れ君臣間の戰にして實に春秋の大變なり。而して王室羸弱の証は之に由て益々馬脚を露はし、次で莊王三年には周公黑肩莊公を弑し、王子克を立てんと欲し、事露はれて殺され史記作莊王四年九年には王人子突衛を救ひえも、兵寡く力弱く、遂に救衛の功を奏する能はず。周室羸弱の程度は、殆ど己に一般諸侯の瞭知する所となれり。

莊公十四年單伯宋を討つに會せしは、是れ暗に征伐の權を擧げて齊桓に與へたると同じ。春秋提公に曰く蓋會伐非王室之事也伐者主之會者從之也、と主客地を易へ、征伐倒致の實是に於て成る矣。既にて莊公十九年衛の師燕の師と周を伐ち、遂に子頹を立つ。周王衛を怒り之を討せんと欲するも、力微にして師を率る能はず。莊公二十七年、遂に卿士召伯廖を使し齊侯に命を賜て侯伯となし、且つ衛を討たんことを乞ふに至る。媚を侯伯に納れて以て臣下を討ず。征伐の權倒行逆施、己に茲に至る。是れ周既に周に非るなり。誰か敢て召陵の役、齊侯の命を周に請はざるを怪しまんや。由是觀之、征伐の權下に移りしは、王室衰頹を加ふるに従ひ益々其勢を失ひ、單伯の會に至りて一たび蹉跌し、召伯の請に至りて再び蹉跌し、陵夷して召陵の役に至り其權全く齊に歸し、城濮の役一轉して遂に晋の手に

歸するに至れり。勢の趨く所譬へば長江大河を決して之を浚るが如く、堰えて之を瀦せんと欲するも、其れ豈得べけんや。春秋提綱に曰く、嗚呼周柄雖移諸侯猶以周目之也日久日忘則諸侯有以列國視京勢者矣と、蓋し亦自然の勢何如ともすべからざるものか。方望溪曰く春秋の初め天王猶征伐の事あり。子突の救衛功を奏せざる以後は復た更に之を聞かず。隱公より僖公に至るの間、會盟戰伐の大なるものは、皆諸侯之を主る。天子微にして諸侯恣なればなり。僖公の末年より文宣の頃に至りては、諸侯怠て大夫張り、宣王の末葉より襄昭に至りては、大夫恣にして諸侯微となり。昭公以後定哀に至りては、則列國衰へて吳楚横なり。と孔子曰天下無道則禮樂征伐自諸侯出、と今や嘗に諸侯のみならざるなり。嘗に大夫のみならざるなり。祖宗以來禽獸と同一視せし夷狄をして、却て會盟征伐の主たらしむるに至る。天下の道なきこと孰れか焉より甚しきものあらんや。而して周室の頽敗遂に復た收拾すべからず矣。

第五節 爵位乱僭

官位爵名は、天王の持てて以て群卿百執事の忠烈を勸奨し、功勞を酬報する所以の名器にして、是に由て億兆を率ゐ、是に由て庶僚を率す、其器既に重し。先王夙に五等の爵を建て、周に至りて更に九等の命を制し、三等の封土を定め以て德を崇み功に報う。是時に當り王命を受けて上公の爵に列するもの甚だ少く、僅かに天子の老王家の客能く公と稱す。太公の師たり、周公の宰たる僅かに公と稱するも、書に齊侯、呂伋と稱し、詩に乃命魯侯と稱するを見れば、太公周公も亦其爵を世々にするを得ざるなり。況や魯孫玄孫をや。春秋以前衛に武公あり。鄭に武公有り。其公を稱するは縣外の諸侯入て天子に相たればなり。春秋後に蔡公州公あり。處公宰周公あり。是縣内の諸侯王室を夾輔すればなり。是を會

て又公と稱するものなし。武公胡公の淫せざるを以て之を陳に封じ三恪に備ふも、其後陳平は侯と爲る。杞は夏の後なり。其子孫の經に見はるゝもの侯よりして伯、伯よりして子を稱す、陳杞既に然り、春秋二百四十二年の間終始公を稱すべきは惟宋のみ。是れ武王殷紂征討の際大功あるに賴る。是を除きて公と稱するは皆僭なり。是故に魯の隱公の父を惠侯と曰ふは可なり。春秋の初年歸惠公仲子之期と云ふに至りて、爵に尊卑なく國に大小の別なく、名器遂に是れより亂る。以上春秋提綱

抑も名は實の實なり。實有りて名從ふ固より其所、名有りて實無き、惟虛名のみ。實有りて而して名なくんば誰か之を欲せざらん。之を欲して得ず我唯自ら取らんのみ。自僭の事はに於て起る矣。桓公立て十六年、是時に當り楚子熊通漸く強大となり、頻りに涎を中國に垂る。而して其荆蠻に伍し、中華の爵位を得ざるを以て之を王室に請ふ。而して聽されず。熊通怒り遠に自僭して王と稱す。武王是なり。其勢漸く將に中國を害せんとす。蔡鄭二國は楚に近き。禍の遂に及ばんことを恐れ、此年蔡侯鄭伯鄧に合し以て聯合するに至れり。

夷狄にして既に王を僭す。魯惠衛桓以下侯伯の公を僭するもの又何ぞ怪しむに足らんや。是より其後楚は益々鷓鴣の欲を逞くし、桓公六年隨を侵し、八年又之を伐て漢淮の間に軍し、九年鄧を伐て之を敗り、十一年鄆を伐ち、十二年絞を伐ちて其南門に軍し、十三年遂に羅を伐ち、楚は悉々日昇の勢あり。而して且つ賢君世に出て、良相政を輔け、後には隨を滅去吳を伐ち齊を攻め、申の會盟以後は殆ど天下の征伐をして己に聽かしむるに至れり。春秋通論

孔子嘗て政を爲すの要を謂て曰く、必也正名乎、と蓋し名正からざれば事順ならず。事順ならずして禮樂刑政教化の具能く張るもの古より鮮し。周王既に諸侯の自尊を矯むる能はず。却て南蠻馭の夷

人をして自ら王を僭せしめて之を正す能はず。征伐の權を擧て之に委するに至る、皆自ら之を取るの
疾將誰をか咎めむ。

第六節 后妃の禍

大學の道、凡そ政を天下に爲さんと欲するものは、必ず其意を誠にす。意誠にして心正しく、心正しく
じて身修まり、身修り而して家齊ふ、家齊ふて而して國天下以て治むべき。是れ事物自然の順序、其身
未だ修まらずして家齊ひ家未だ齊はずして國天下治まるものは未だ之れ有らざるなり。詩に關雎あ
り、書に無逸あり、一家閨門の事已に齊ふ、推して天下に及ぼす亦相同きのみ。虞夏商周の初代以て見
るべきなり。世降り俗微なるに及びては、淫風行はれ、閨門修まらず、九族睦しからずして、同姓相戕
ふ、其天下を傾覆せざるもの殆ど鮮し。

春秋提綱に曰く、春秋以來宋魯には公族の患あり、齊晋には世卿の患あり、當時列國國として患なき
はなし。二百四十二年間周室他の變なし。唯並后匹嫡の事實に周室の禍根たり、と信なる哉言や。幽王
妖女を寵するに及び、申侯その尊を失ひ、世子其嫡を失ふ。正月の八章に赫々宗周嫪婣滅之とあり。千
載の下是詩を誦するもの誰か泣血憤惋せざるもの有らん。而して平王は實に其實況に處し、深く其弊
を悉せり、豈憂謹惕厲戒心恐懼する所なかるべけんや。而して正月の詩未だ人の口を絶たざるに、宰
臣を派して仲子の賄を歸らしむ。萬乘の尊を屈し侯伯の妾に禮す。而して已れ死て侯伯の賄を納る
ものなきことを悟らず。當年申侯に頼りし苦艱の念今何れにか在る。

幽王以來歴世既に后妃の禍あり。繼て王たるもの最も警戒を茲に加へざる可らず。何事ぞ桓王立て未
だ幾ならざるに世子の嫡有るも尙子儀の寵あり。周公黑肩暗殺の企謀は固より其所なり。尙も辛伯の

密告無くんば、莊王の命未だ知る可らざりしなり。莊王已に立つ矣。深く前代に鑒る所有る可きなり。而し事茲に出でず、王姚を嬖し子頹を寵え、遂に五大夫の亂を見るに至れり。有周の命脉必ずしも後王を待て滅びざるなり。會々鄭號の惠有りて僅かに其命脉を維持するを得たるは奇と謂つべし。

周室后妃嫡嗣の患は、啗に茲に止まらざるなり。惠王既に立て輒く婦言を聽きて長を廢え、少を立るの謀に従ひ、周家の亂るゝもの實に二十餘年、首止に會し洮に盟ひ、遂に出て、鄭に居る。苟も前に齊なくんば襄遂に立を得ず。後に晋なくんば襄將た安を再び歸るを得んや。此れ皆乃祖乃父に鑒みずして、禍を其子孫に貽するものなり。嗚呼幽王立て三年褒姒を寵して以來、魯の僖公廿四年襄王王城に入る。一百六十六年間、七王大抵並后匹嫡禍亂相尋るの日なり、嗚呼豈甚しからずや。以上主として春秋提綱に據る

嗚呼良相賢臣あれば以て諸侯の專恣を抑ゆべき也。名將勇卒以て九夷八蠻を制すべきなり。制度典章以て萬民を御すべきなり。官位名爵を與奪して以て忠烈を勸獎すべきなり。苟も私行修らず閭門亂れなば、人將に其餘を食はざらんとす。況や富萬乘を併せ、貴天子となり、職萬民の師表となり、以て群卿百僚を引率すべきものなるをや。征伐倒行と云ひ、爵位亂僭と云ひ、封土分割と云ひ、王臣下交と云ふ、皆是れ外の禍なり。外より起るものは亦之を外に禁すべし。一旦弊内に兆す、苟も之を矯めずして外を制せんと欲す亦己に難い哉。

第七節 列國興廢

天下紛々乱れて麻の如く、群雄方隅に割據し、雲蒸龍變、喧闐歐擊、長少を凌ぎ、強弱を併せ、各尺寸の封土を争ひ、機を察して動き、勢を視て乗ず。孟子の所謂春秋無義戰者にして是に至りては、周室は有れども無きが如く、縱令空名を一隅に擁するも周室の事は殆ど已に諸侯の腦底を去れり。嗚呼吾れ是

に至りて又何をか言はん。今春秋滅國一班を擧げて以て列國の興廢を見るに供す。馬駟著左傳事緯

魯滅四國 頂、根牟、鄆、郟、

晉滅十三國 耿、霍、魏、虢、虞、潁氏、甲氏、留吁、鐸辰、偃陽、肥、陸渾、鼓、

齊滅五國 紀、譚、遂、鄆、萊、

秦滅二國 梁、滑、

楚滅二十國 權、申、鄧、息、弦、黃、夔、江、六、蓼、庸、蕭、舒蓼、舒庸、舒鳩、賴、唐、韻、胡、陳、

宋滅一國 曹

衛滅一國 邢

鄭滅一國 許

蔡滅一國 沈

莒滅一國 鄆

邾滅一國 須句

吳滅二國 徐、巢、

越滅一國 吳

狄滅一國 温

方望溪の春秋通論に述る所に據れば、晋は五國を滅し齊は二國、楚は十四國、莒衛蔡鄭各一國、吳は三國を滅し、虞は一國を滅すと有るも、幾も無くして虞は既に晋に併せられ、幾多の小邦は譬へは水泡の漸次大泡に吸取せらるゝ如く、強は益強弱は益弱にして、戰國の際に至りては僅かに七個の大諸侯

を見るに致れり。蓋し周の衰ふるより諸侯互に兼併を事とす。而てて莊公以前其經に見ゆるもの甚だ稀也。是れ楚は未だ魯と通せず、列國亦敢て滅を告げざるに由る。晋の獻公武公は國を兼ねる甚だ多きも、下陽以外は皆書せず。隱公二年莒人向に入り、宣公四年魯莒を伐て向を取り、而して事經に見えず。然らば則國を滅して告げざるもの頗る多きなり。左傳に曰く雖及滅國滅不告敗勝不告克不書于策、と然らば則列國の存亡にして、猶之を遺すものあらむ。今只其梗槩を録するのみ。

之を要するに、封土分割と云ひ、王臣下交と云ひ、征伐倒置といひ、爵位亂僭といひ、並后正嫡と云ひ、尙も其一あるも以て邦家を削弱し、以て淪亡を招くに足る、今や王室の陵夷と共に是等の流弊相次て生ず、積弊の極豈能く社稷の殄滅を免れざらんや。

(完)

歐州植物學輓近の進歩を讀む

大野 禧 一

(一)序。

(二)その概綱。

(三)科學家はりの學界の大勢を知ることを要す。

(四)科學家は學界當時の大勢を報導する責任を有す。

(一)序

著者三好博士は其の猶、農科大學の教授たるの時に當り、時々生物に關する論説を小年園に寄せて、吾人等に自然界の美妙を説き、以て大に吾人等の生物に關する好奇心を喚起せたりき。加ふるに其の文流麗朗々誦すべきを以て大に吾人等の注意を引き、學園欄内氏の文を見ざるべきの如きは、大に不満を感ずる程なりき。その春光野色を説き、登山の景を叙するが如き、今尙歴とて吾が胸中に